

大弘山光明院法國寺藏當寺緣起（仮称）

（題簽剝離欠尖）表紙 （白丁）表紙見返

爰に彈誓優婆塞尾州海部の郡の人也母なん青山の氏族にして下れる品の人にはあらず嬋始たる顔艶にして楊柳の姿弱たをやかなる心の才智取ふかく言の葉におく玉銚の露の情も恨なくうちむかふ父母たにも哀とのミ見物から夷人の塵に見成さむ事も本意ならず覚へしかは事の所縁を尋て花の都に「^{01オ}送りかけまくも忝も雲井遥の程たかき君の御傍につかふまつりて花にめて月に嘯て数多の春秋を重ね給ひぬ然るにむかし植おきしミのりの種や生にけん花を詠めてハ常なき風を身に歎きいつしか散ん梢そと忍涙に袖の露問へハ玉とや答ぬへし或は月の夜すからは冥にまよふ心の闇いつかハ晴む我か身そとくまなき空もいとしく朦に「^{01ウ}見ゆる斗なり

大宮人の習なれハ春ハ終日に花の下に立寄りてあかぬ名残を桜の梢に恨ミ秋は夜すから月の前に興を催して盡せぬ詠を曉の横雲に悲しめり百千鳥の聲を悦ひ男鹿の夕を悲しむより始て春夏秋冬花の色く虫の聲くいつれか心を痛ましめすといふ限やハ有中にも女は優なるたに心乱て貪着の^{02オ}おもひいやましに野中の清水人知れず通ふ心はありそ海の濱の真砂の数く恨もはてぬ物ゆへにとわぬ間ハうら紫の藤袴なにとて松に懸り初けんと涙は玉の緒をよはみ落て乱るゝ優さをのミ歎きおもわん類のミ多かんめるに此上人の御母ハ常にさりけなき心の内に忝の中を何に譬ん朝ほらけ漕行船の跡の白浪の立かとすれハ消ぬめる秋の田を「^{02ウ}ほのかにてらす霄の電しはしとたにも見へぬ身を忝に有顔の愚さよ角ていつまてとなからへはてん悲さを思へハいとゝあじきなく野寺の鐘のつくくと思ひ明せる曉の枕にさそふ聲の内に

世の中を秋の夕の夢にふして今日曉の鐘に驚く
と憂忝の無常しみく身に染給ひて住馴し玉の墓も今は憂し錦の床も何にならんとも「^{03オ}忍ひて内裏を出給ひ何国をそことはなけれ共念く心にひかれ行秋こし山の薄紅葉とめかねし逢坂の関守とてもなから山雲の端立に詠やりそも開闢のむかしより衆生済度の悲願にて鎮護国家の御法には一

乘無價の妙典を弘めおかせ給ぬれハ我く拙なき女也とも無二無三と聞ときハ誰かは漏るゝものあらん諸法実相隔なく導き給へとふし「^{03ウ}拜ミかゝるミのりにあふ事も近江の海の濱ちかく如渡得船の便船をまちえて渡る心のうち神も佛も諸共哀ミおほしめすらんとありかたく社覚ける

宮もわらやもはてしなけれハ唯世の中を獸入山ハむかしの跡とめてこゝそ我身の尾張なる海部の里に立帰たりき姿を心から思ひ「^{04オ}やつして唯獨り幽に柴の庵をしめ一向後せの勤にて明し暮させ給ひけり然に或年の春二月の中の五日の夜西梵の其昔跋提河の邊にて人天大會に悉涙にむせひし月を思ひやられて今更かきくらさるゝ心地してしはし睡ミ給ひしに弥陀の三尊目のあたり来り給ひて有難や短冉をなん給ハリけりいかなる詠めなら^{04ウ}ましと頂き見れハ歌ならて六字の名号なりけらし汝是を吞へしと告させ給へハ其儘に吞ぬとミへて夢覚ぬ心地もよの常ならずして身こもる事不思議さよ一生けかれぬミつからにかゝるためしはいかよふに佛の勅に随て權りに來れる法子ならましと末多頼母しくおほし居にけり「^{05オ}

其年もはや立て明る卯月の望日の夜に忝も弥陀如来又も夢中に現て一本の蓮花をたひ此花の上にして快産を成し小兒か名弥陀摩といふへしと宣ふ告に驚て其儘平産し給けりゑならぬ匂ひ庵にみち白筋二流天降り目ちかく見へて侍りしハ不思議なりける事共なり「^{05ウ}

いたはしや母うへは玉のごとく縁子を神の光に移とも誰を友にかなつかしミ事問人もあらされハかこつかたには弥陀如来のふかき誓や夏衣ひとへに頼心にて漸四歳に成給ふ時に弥陀の三尊目のあたり僧形に現て小兒を慰め給ひける小兒是を絶すして阿弥陀くくと唱へつゝ三字の名号怠りなし「^{06オ}漸年月重りて七つと申御歳に井の本立寄てはからす落入給ひける母うへ驚き悲しみて為方涙にかき暮て哀いかにや弥陀佛と聲をはかりに悲しめハ忝も弥陀如来忽來現し給ひて大慈大悲の御手よりも撰取不捨の綱をたれ小兒を引舉給けりけに有難や誰たてもかゝるためしはもれしかし唯ひたすらにくりかゑし頼む「^{06ウ}月日に関守あらされは過行年の重りて九の年の春梢に膽花を見て忽無常を悟りつゝ哀慕なき憂忝かないつまで角てあらましと獨こちしてそれよりも母のミもとに行給ふ母うへ小兒の氣色を見て何をか物をおほすらん恠しやなと聞ゆれば小兒泣く宣ふハ老少不定の憂

世とはいつの頃にか成り初し昨日見し人も今日ハなく朝に榮し」^{07オ}輩も夕をまたぬ蜻蛉の有にもあらぬ世の中に過し月日を送りなば永き悲ミたりぬべし母の別れハ更なれども我に暇を給れよ唯速に出家して母諸共^ニ成仏のしたくせましと宣へハ母うへ是を聞給ひ兼てしおもふ道なからいまた二葉の齡にて末はる^ノの不審さに胸うち塞き悲しくて袖になかるゝ涙川せきとめかねておはせしか」^{07ウ}しはしとゝめて宣く公の宣ふ言葉の末理に侍れとも自ら齡も程あらしいかにも見成し給ふ間に歳も漸くたけぬへしいか様をりのありなんかししばし留り給へとて慰給へハ弥釋磨重て歎き給くハ花もちり月も傾くためしのミ哀といはんは愚也人の草葉の露常なき風に誘て今や消なん時の間も有れば有るに定なき會者定」^{08オ}離の事なれば逢も別の初なりかゝる住家を獸入法道こそ頼母敷無量寿佛の御國なる花の墓に遊なばいかならましと有けれハ母うへ道理にふせられてあかぬ名残の言草を末葉の露に契りつゝ互に泣^ノ立別れ旅衣着初ていつかハ袖のひたち帯めくり^ノて極楽の花の墓や逢瀬なるらんとなみたなからもたのもしきかな」^{08ウ}

去程に弥釋磨ハ不思議の暇を乞請て別れを悲む涙にも修業の首途悦て自髮拂捨沙門の姿に身をやつし名を弾誓と改て美濃國に聞およふ塚尾の御堂に参籠し修行誠に百日誓て坐をたゝす帰命救世觀自在哀愍納受得菩提と謹て祈請有り其期も漸^ノ燒の夢もほの^ノ醒ころ忝も大悲主ハ僧形に身なし目前現て衆生済度の」^{09オ}手を合彈誓を拜給ふ誠に即現比丘比丘尼の普門示現そ有難き

猶しも美濃に駐りて武義の郡の山陰に艸庵を幽にしつらいて人も問こぬ網戸をしめ道をは松の落葉にて埋隠して唯獨心を澄し給けりいかに心のすめるにや移月日の程もなく二十餘回の霜過て髮鬚居たけに生まさり高野大師も角やと思ふ斗なり」^{09ウ}

扱草庵を立出て諸方に遊行し給ひけり是より信心功積りて利益の数ハしら糸の染てや花の藤衣誰かきぬ^ノの別まで哀とおもふ心より施す法の道するへ尋ね^ノて行程^ニ近江の国に行暮て今宵夜守山にかゝり寝の宿をたつめれば里人告ていふらくハ八洲の渡しの橋にして反化のものゝ出をりき夜な^ノ人をあやまてり日も山の端に傾けり必行事」^{10オ}なかるへし彈誓是を聞給ひいかなる物の業ならんゆきて見はやと思召彼の橋上に坐し夜すか

ら念佛し給ひけり夜もたけなわに成ぬれハ女人靈鬼頭れ出上人に近づきて我れ慳貪の酬にて餓鬼道にくるしめり哀れ上人慈悲を垂れ何とぞ救給われと泣^ノ語る影見れハ髪にまされる焔に添て口より火焔吹出し骨と皮とに身ハ成りて見るに」^{10ウ}忍はぬ哀さよ静に念佛し給へハ得脱しぬと悦て再び見へすなりにける

漸花洛に成りぬれば五条の橋にたゝすみて彼方こなたを詠るに都ハ春の錦にて花の色く咲乱て安養界寶樹の蔭嘸やと思懐しミ大原の方を見給ふに不思議や异香花降りて音楽幽に聞へつゝ紫雲たなひき限りなき数の佛を見へ給ふ」^{11オ}中にも弥隨の三尊は威儀堂々とおごそかに拜れ給ふそありかたき此時心眼開れてそ諸法実相隔なくすミ渡るかな法の玉水

或時に津の国の一の谷に至りつゝ寿永の春の比かとよ平家の一門此にして源氏の大將義経^ニ討亡されし群兵の数も知られぬ哀さに其夜ハ此に夜もすから心の須磨の浦浪に所有聖霊」^{11ウ}得脱と静に念佛し給へハ更たけなわに及て三鬼目ちかく顛れて上人に對面し阿修羅の炎止期なく今まで苦趣^ニありし身の今夜かしこき手向により唯今善処に趣とて各悦うせにけりとそ明ぬれば上人は漫^ノたる海邊に出西を遥に詠めやりけに恋わふる弥隨佛ハあなたに須磨の浦波や泣音に迷ふ心地して念佛頻に唱ふれハ」^{12オ}有難や弥隨尊ハ忽來現し給へて汝信心至誠にして呼ハ答る山彦とて咲を合御手を垂れ大寶蓮花を給りて此花の上にして我を拜して快く利益をなせと仰せけり母に授けしむかしまて思入江の艇小舟乗りてそ西の岸に至らめと其儘花の上にして相好圓滿の秋の月白毫光寒して拜し給ふそ有難き」^{12ウ}

紀州熊壁の三の山たくひ稀なる其中に殊^ニ本宮本地身弥隨尊仏と聞からに結緣寔に懷^ケ敷彼に詣て、夜もすから法施の念佛唱へつゝ心を澄しておわせし時西國三十三番の順禮終れる女性有り此宝前に帰り來て八葉の大鏡を権現に奉り一大圓鏡曇なく智慧の光を明らけく照させ給へと伏し拜ミ帰るとひとしく権現ハ僧形に顕て彈誓に告給わく」^{13オ}汝済度の悲願あり此鏡をあたふるなり衆生の善惡てらし見て利益をなせと仰けりためし稀なる事共ハ今に鏡のあるそかしこき

中津の国の諸人ハ法の諸縁も数多し邊土の類こそおもへハ殊^ニ不便なり不請の友に鳴海沓うらへの舟に便りして佐渡の國にうち渡り相川の市に入

水を汲薪を樵り貧しき家に助を成し唯いつとなくうちしめり明暮念佛」^{13ウ}
諸共に結縁をこそし給ひけり

佛名を口に絶されれハ人々〳〵恠しミいかやうにや□有ものと覚へたり出家を勧め我人の後世の便りにたのまんと誘引て川原田の常念佛の師と頼出家得度なりにけり髮剃法衣身に纏ひ明暮念佛し給へて食事をだにも知らされハ寺僧同宿あらけなく増〳〵嫌ふ」^{14オ}物憂さに又市町に立まじりなかして捨る食物を捨て命を継はかり僅も信施をうけずして徧に修業し給ひしハ彼唐土の國清に寒山拾得をえてすたれる食を拾いつゝ衆生を利せしに異ならすけにありかたき類ひならまし」^{14ウ}

猶飽たらず修業地に進む心の物強く檀特山に引籠り木食草衣の身となりて六年修行し給ひしハ忝釈尊のむかしも角やと覚たりかゝりけるおりふしニ異類异形の天魔共無窮の形に身を變し上人を惑して菩提を障んとはかりけり去とも上人恐すして徧に称名し給へハ念佛の聲につれ光明口より現しつゝ普く外魔を照し給ひ魔民大に」^{15オ}驚怖して皆ちり〳〵ににけうせぬ不思議なりける事ともなり

又或時に白色の男鬼一人頭たり鍔の履をはき鐵の棒を持一打にと臆怖と□愚なり去共少も驟すして静に念佛し給へハ東の峯よりも醫玉善逝來現有り汝」^{15ウ}恐るゝ事なかれ是西方の教主そと告させ給へハ其儘に弥陀尊佛と顕れてかねのあしたかねの棒彈誓に給ひぬ是より彈誓上人は常にかねのあしたをはき又かねのほうをつき諸國遊行し給ひけり如來方便無窮にして折伏摂受数〳〵に顕し給ふそ有難き」^{16オ}

其後猶も不思議やな盲たる白色の女の鬼こそ來ける其時觀勢二大士ハ僧の姿に身を反し彈誓に立添て汝恐るゝ事なかれ是亦化現そと告させ給へハ忽に霞幽に宮殿現しツ、佛身顯し殿にいり帰らせ給ふそ有難き善惡男女もらさしとちかふみのりの其しるべミつから顯し給ふにや大悲の海の深さ知られす」^{16ウ}

大慈大悲の深けれハ猶も不思議を現して弥行者の信心を堅固になさしめ給ひけり忝も弥陀如來骸骨に變化して彈誓に告給ふ汝大夏を究んと信心堅固におもひなハ必肉身すつへきなり此身をおしむ事なかれ此身をおしむ故に社罪障の山たかみ生死の海のかきりなし我今骨髄を顯して此理を示そと

告させ給ふそ有難きけに世の中ハ」^{17オ}秋の田のかり穂の庵の憂き住ひ誰かは袖に白露のおかぬためしや新玉の年立歸る若緑幾千代かけて愚にも迷ふ心のはてしなくなかれ渡りて川竹の杵々の姿に心をとめおしみならひし酬にて佛の在世程速き今末の世に生れ來て悲しき中」^{17ウ}さりとてハ我等かために誓ふなる弥陀の悲願逢ぬれハ是淺からぬ縁なめり今度身命なけうちて」^{17ウ}安養界に至らずは又いつとかは思ハまし中たるみなく人〳〵よ命をさきに勵むへきなり

或時上人上求菩提の山よりも下化衆生の瀧に下り弥陀心水有難く沐身頂と觀念ししは〳〵瀧にうたれし時五社善神來現有り上人に告給ふ汝苦行年経ともいまた神道知らず」^{18オ}神國に生をうけ争か是を知らざらん但神道深秘にして凡骨にては受かたし凡骨換てゑさせんとて春日右に寄給へハ住吉左に近きぬ熊野權現前」立忝も八幡は智劍を以て上人の背筋を裁て凡骨をぬきかへ給へハ太神宮神水汲て頂上に洒給へハ其儘に痛も痕も更になし此時心眼明了にて睡夢の醒しか如く也時に五社の神達ハ神道」^{18ウ}授て帰ます有難かりける事共ハ言葉にも更に及れず思繼て涙のミなり

或夜一天晴わたり閑洞静なりけれハ心もいと〳〵清らかに勇て称名し給へハ窟内光明かくやくと白晝よりも明けし忽三身來臨有り深更にして檀特山高妙報土に反しツ、安養」^{19オ}界に昇ならず弥陀廣大の身を現し微妙の法を説給ふ大日如來釈迦如來最勝蓮花如來とや三仏を上首として十方所有の諸如來一切菩薩摩訶薩等星のことに列て霞幽世界に充滿り其時弥陀尊目のあたり彈誓に名を授け十方西清王法國光明彈誓阿彌陀佛とそ喚給ふ法國光明目のあたり聽しみのりを亡すして悉く書しるし六軸」^{19ウ}經として傳へ給ふそ有難き凡印度もろこしハ境遙の國なれば暫く是をさし置ぬ我」^{20オ}葦原の昔よりかゝるためしはまたなし思へハ彈誓上人は猶程ちかき祖師なるを唯凡類に思ひ成し其徳行の数〳〵を知らてやミなんん々の機縁の程の恨しきかな」^{20ウ}

説法既に終れる時白蓮所乘の尊顔をもち觀音大悲の御手よりも彈誓に給りぬ時に則弥陀如來最極大事の念佛を悉く授ツ、各本土に帰りまし一念の化儀もはやうせぬ上人歛岳身に餘り夢とも更に弁へすみくしハ今に傳て大原の御寺に安置せりかゝるためしを聞ときは身の毛も卓立て有難き」^{20ウ}ま

して拜し人々ハけに朝かほの花よりも先たつ朝の白露の落てハ更に路もなく成りなん後のたま物に成らまし物をと哀なりけり

忝も上人ハ現身に成佛して弥済度の慈悲ふかく猶檀特に有なから樵夫の²¹道に横たわり逢もの殊²⁰念を授て利益し給ひけり人ハいさ知らぬならひの物うさは天摩鬼神の恐を成し往來已に絶ければ市町薪に苦しみてせこを入れ山を狩り唯手捕にと寄來上人是を悦て静に念佛し給ふに人々恠し²¹寄り見れば反化のものにて更になく大悲柔和の相見へて称名こゑ澄聞ゆれ²¹昔し²¹ウのゆかり懐しく各感涙なかしつゝ夢²¹夢みる心地して拜²¹貴ミそれよりも藤やかつらを取集め木枝をから組て上人を昇乗ツ、山鹿の里に歸來て我もくゝと供養をとけ貴賤道俗群をなし利益は日々に盛りなりけり²²

(百丁) 22ウ

利益國土に普して念佛申さぬ人もなく名号かけぬ家もなし爰に日蓮宗の人竊に師の徳慕ツ、何とかなして名号を授りたくハおもへとも我か本宗を憚りて角とも更²¹いゝ出す料紙を箱に打入て歎く月日を過ぬれと思ひ忘れぬ悲しさに人傳なから上人をたのミ哀を垂て名号を給れかしと聞ゆれば上人微笑して²³オの給ひ早速かきて授たり懸て示せとありければおもわずなから立帰りぬしに角そと知らずれば恠しなからも箱をあけ紙をひらきて見てあれば名号題目をし並さも分明にあそはしけり各感歎聲を舉泣く²³拜し奉り我か家の重寶とて子々孫々に傳へたりかゝる奇特の数くゝを何とかいはん限り知れず²³

佐州の機縁漸に純熟しぬと覺ゆれハ餘國に結縁あらましく実相無漏の大海に衆生済度の船うかめ大慈大悲の風ふけば方便利生の帆を揚て還來穢國の岸につき越後信濃の境にて大に利益を成し給ふ趣²⁴訪の山邊の唐沢にはしめて一字を造営し自から額して光明山阿弥陀寺と社号しける晝夜²⁴オ六時の勤行に参詣市をなせしかは德行日々に顕れて山より落る瀧つ瀬の幾代にたらぬ利益ならまし

其頃甲斐に故心といへる道心あり或時の事なるに勤に倦とはなければとも暫睡眠し給ふに彈誓夢に見へ給ふ其躰真に²⁴ウ有難くたゝやの人にあらざるなり犁の髪ハうつくしく腰よりたけに生まざり端嚴御手こまやかに膝よりすきて垂れ給大悲柔和の顔ハ青蓮眸なつかしく撰取の粧おこそかに白毫

光明を頂に戴く冠ハ互に玉の影ミたれ耳に貫く環こそ偏に金の光まし身躰紫金の色にして白き法服用著給ふり右の御²⁵オ手の内よりも白雲一村立あがり其内の雲よりも三本の蓮花生出たり又御口の内よりも出る光明影すこく光明の中におのづから化佛の三尊立給ふ化佛ハ雲の花を踏三縁ひとしく顯せり上人ミつから頂より輪光現して普も四邊の山野を照ツ、九重の寶座に垂たまひ威儀堂々とおわします信心肝に銘しツ、打驚て²⁵ウ夫よりも信濃國に至りツ、上人にめぐり合瑞夢のやうを語るゝ上人ハ笑を含て宣くいしくも尋來りたり夢を合見せはやとて諏訪の湖水の邊に立雲に乗り花を踏て光りを放ておわします故心夢とも弁へす五躰を地に抛敬礼し終に誓を起しつゝ尊影あまた書写し普く衆生²⁶施して利益のはしとそ成りにける²⁶

夫より諏訪を立出て武藏に趣給へは小机郷鴨居村ノ山中にほら穴あり其中²⁶籠り居て千日の念佛を開闢し給ひしを其頃武藏に名もたかき幡随意白道上人ハ一通の書を馳て彈誓如來のミもとへとす誠に敬ひ奉りひたすら請待有りければ²⁶ウ鴨居の山邊を立出て同じき國幡随意和尚の御もとへ案内角と宣ふに和尚悦立出て七世の孫に逢ふことく方丈の室²⁶入我れ佛勸を蒙るといへともいまた師傳念佛相傳無シ傳法をと宣へハ幡随意和尚佛勸の其上²⁶愚僧相傳如何也しかしなから任御望如何候共七日七夜の其程ハ唯夢の間の心地²⁶寢食互²⁶忘つゝ傳授傳法悉く師資芳契浅からず有りあふ²⁷會下の衆徒までも寄異の思を成しにけり内證權化の寄合給ひいかなる事か有けんと思ぬ人こそなかりける

是より相模に打越て早川の庄²⁷ゆき塔の峯に分登りふかく岩屋や籠り居て静に念佛し給へり或時の事なるに何某と²⁷ウいふ国守山野に狩して思はずも此処に至りつゝ誕生²⁷を見出して人里遠き此山にかくてあらんハ不思議なり人間にてハよもあらし唯打殺せと旬て数多の犬を追懸て責とすれハ不思議やな犬とも頭を低て足膝をりて吠もせずいよゝく瞋て²⁷ウとり唯一筋にと箭を射れ²⁷其前に落て行つかす人々是に肝を消し五躰すくみて²⁸働かす其時上人宣く人々あやまつ事なかれ我ハ修行の聖なりしはらくも爰に居²⁸あやまちすなとはかりにて静に念佛し給²⁸□□国守ハ是を聞前非を悔て手を合ねかわくハ上人に此山林を奉らん永く留り給へとて敬礼してそ帰られける法のしるへの有山にかゝる道人ましませは化導盛りに成りゆきて

光もいと、^{28ウ}あきらけき阿弥陀寺社なりにける

此支普隱なく国中に聞傳て貴賤道俗おしなへて我もくくと參詣し名号授り日課をうけ葦酒の穢を誡めて齋戒念佛いさきよく身命みのりに抛て偏に往生乞ねかひ或は岩の狹間^{29オ}にふし苔の席に泣ありし或は松の木蔭に寄落葉を敷て夜すから西に心を空蟬のもぬけはてたる聲澄て念佛頻りに唱ふれハ山河も動はかりなり人々寄合儀すらくハ今末の世に生來し果報拙なき我くか不思議の教化に預りて今度成佛とけん争けに優曇花よりも思へハ稀なる時そかし佛閣造営有らまじとて^{29ウ}岩屋の前を引ならし材木はこひ芳をよせ忽ち一字をいとなめは上人光明阿弥陀寺とミつから額を懸給ふますく利益しげれハ海龍王も感應し夜ことに龍灯飛ひ來り神慮も動きましく箱根權現貴女となり來て血脉うけ給ひ兩顆の珠を供養してかへらせ給ふそ有難き然るに寸善尺摩とや大盤石を霞幽より抛けれハ^{30オ}佛閣もさなから微塵に成りにけり数千むらかる其人の獨もあやまちなかりしハ奇特なりける争ともなり殊更に奇特を顕していよく佛法弘めんため假に摩王と成り給ふ權化の方便ならましと思はぬ人こそなかりけり^{30ウ}

麓の里の小田原に大蓮寺の住持たる鏡誉以天といへるあり道心甚堅固にして才智も有し人なれば殊に上人を敬て日夜に登山怠なし信仰帰依の餘にや或時密に申さるゝハ上人德行顕れて利益其数知られねとも有髪にてましませハなかなかは怖を思ふへし唯願は御髪ををろさせ給へとありければ上人答て宣く此支甚易けれと^{31オ}我か髪ををる人ハ身命はやく亡へしいか、せんと宣給へハ其時彼僧よろこひて諸人の利益に命を捨疾安養に至るへし上人哀愁納受して正念守らせ給へとて御髪おろし奉り悦給へハ程もなく時日定めぬあたし壁の常なき風の音信て艸の葉殊におきわたる露吹はらふ夕間暮日影も西の山の端にかゝるあやしき^{31ウ}紫の雲間にむかふ花にのり峯の嵐か琴の音に多ならぬ匂ひ庵にミち聖衆の來迎拜ミつゝ往生本懷遂給ふ有難かりける事ともなり

同じ國の北山に紫の雲立まよひあやしき事のありけりと人々いへるを聞給ひ^{32オ}上人自尋行彼処を見給に人里遠き山にして松杪寔に茂り合鳥の聲たに聞へねば憂世の中を黙入住家なめりとおほしめし峩々たる岩の洞にいり松吹風を友として夜すから称名聲すめハいつしか峯の雲晴て真如の月の

影きよく実相般若の音すなり鹿の音ながら秋萩を誰かハ此に移しけん夕間暮こそたゝならね曉^{32ウ}叫聲きけハ愛猿腸断ぬへしけに彼等まで外ならぬ一佛性の有けれハもらさぬ慈悲のいとふかく念し給へハいつとなく路を慕て諸人は山をあかりてたづねゆき岩根にふしとあらされハ頓て一字を造営し貴賤群集なせしかは心驚無常山淨發願寺と額をかけ日夜に利益し給ひハ果徳難思の顕れて止事なしにおのつから^{33オ}再此世に還り來て導き給ふ印ならまし

いとゝたに北の山露寒き夜嵐を防き煩ふ岩の室流石哀と見へし頃不思議やな空よりも大磐石の降り來り岩や^{33ウ}の口の北に落あたかも扉のごとくにて窟内風をうけされば身心安居の洞にして平等性智やひらけにし此石の上よりも日ことに紫雲たなひきて夜毎に聖衆の來迎を拜ミ給ふそ有難きげに心なき草木もうかふためしやあら玉の春の霞もたなひきてほのかに峯の桜木にかゝるハ藤の花かそもそれにはあらて^{34オ}紫の一村雲の纏しハはや煩惱の根をきりて即得菩提の姿そと彼木を切寄^セ上人はミつから姿を刻おき猶も未來の結縁に漸斧をめぐらせは不思議やなあつき血忽なかれ出けれハさて此儘にたりぬとて袈裟うち覆納めしに今に寄持の絶すして光明异香よりく信男信女親たり拜けるこそ不思議なれ^{34ウ}

此國の結縁歳に重ぬれと新田をかえす賤の男も宝号口に悔たらす早苗を賦佐乙女も田歌に念佛唱ふれハ思そ伊豆の山里や何を駿河の国つたひ引手に脆き玉の緒も絶ん限りハ法の道行も帰るも漏さしと遙々今ハ遠江深く堀江^{35オ}里にいらり柴の網戸を館山に籠り給ふそ有難き人里近き山ながら風景誠におもしろく岩を便りの松か根岸うつ波にあらわれて千代や経にけん傾けハ卧龍の姿も角やらんと嶮しき岩につとふなる蘿や蔓を便りにて峯に登れハあやしやなむかし誰かハ住つらんもらぬ岩やもいり見れハけに袖ぬれて哀なり角て月日の程ふれ^{35ウ}ハいつ山桜咲初めて其香やもれし国民ハたすね來て残なく結縁を社したりけり人木石にあらされハ教にならふ心より露の無常をかなしミて獵漁をやめぬれハ五辛の穢も永断齋戒念佛日課をうけ堂宇佛閣悉我劣らしと宮めは上人額をかけ給ひ蓮花寺と名付て説法教化し給ひ結縁せしむる人数をしるし給へハ程もなく二百七^{36オ}万余人いづれも同じ心から异口同音に念佛のこゑをたつねて迎なる佛の誓頼母敷かな

堀江の里を始として近江隣里の人々ハ老少男女の嫌なく二季の彼岸に成ぬれハ各御寺に集りて齋戒念佛或ハまた断食などに身を凝し終日鐘鼓打ならし三字³⁶七反おし返し勤めけるこそ有難き文中の二日より十六日いさ夜を限として今を盛りの男とも精進潔身をきよめ白きゆかたに茅の笠おの／＼竿にすかりツ、鐘と大鼓をうちませて聲をはかりに念佛し晝ハ里／＼入乱互にかけつかけられつ挑灯兩張先にたて数百千人ゆきちがひ夜館山まふてとて村里分て登りける³⁷由来をいかにと尋ぬれば三河の大□家康公甲斐の信玄取合に数万の群兵此里の堀江に沈ミ陸にうせ其亡魂の数知らず小雨降日の暮方ハ光渡りて聲を擧山壁に時を作りけりか、れハ国民恐懼上人に歎しに我かをしゆるに随てかやうに念仏勤なは再度出しと宣へは各うけがひ始しより亡者残らず得脱し重ねて³⁷出る事そなき称名念佛其勤永く絶せぬ法と成りけり

是よりも上人ハ尾張国に趣て海部の里に行給ふ故郷を出しそのかみに一佛浄土の契にて別を取し其後は母の便りも白浪の消て跡なき草の庵ハさすかに哀³⁸ならましとむかしの名残今更に思出つ、來て見れハ見しにもあらず荒はて、住人もなき山路の露はらはぬ袖のそはちてハ所せくして中／＼に桃李し物をいふならば哀むかしを語まし花の梢によはる風誰とへとてか呼小鳥壁もせの雉子おのつからなきて哀を告るめりかゝる墓なき住家すて³⁸今社生る浄土にて無比快樂を受給ふ母聖靈に法樂の念佛しは／＼手向ツ、同じ功德の池水におひ咲る蓮葉の露すミ渡る心から又立別都路に趣たまふそあれなりけり

去程に上人ハ多くの衆生を濟度して³⁹化緣漸過ぬれば穢惡の跡を晴まして無為の本家に還らしとて終に慶長二七の年再花洛に登りつ、取初五条の橋にして來迎拜ミし北山にたつハ烟か白雲か小野の炭竈あしきなく尋て又も大原のむかしもしるへ故知谷にふかく分入給ひつ、松の木藪を菴にて苔むす岩の上に座し明暮念佛し給ふに³⁹常隨給仕の才子ともハ岩屋を穿て師を移し恩影常に懐ケ敷つかふまつりて怠らず称名念佛せしに隠とすれは山の水流出る谷川や八瀬藪に漏聞てハ谷を登□岩つたひ我も／＼と詣て往き念佛授り名号うけ日毎に利益重りて堂宇佛閣宮めハ諸仏ます／＼護念あり光明峯⁴⁰絶されハ光明山と額をかけ弥陀尊殊に⁴⁰透もなく來現

あれは寺号をは阿弥陀寺と社呼給ふ徳行いよ／＼顕れて洛中洛外悉貴賤男女限りなく來て結緣かふむれハ幾内近國をしなへて普く教化に預りぬ漸時こそ至りけん慶長二九の年の夏五月の下の五日とよ大寶蓮花の上にしてしは／＼念佛し給ひて端坐合掌其儘に終を示させ給ひけりか、れば⁴⁰ういつしか大空に紫雲たなひきて花降りゑならぬ匂ひ靉しく音楽空に聞へツ、光明山野にかゝやかし幽に見れハ眼雲路に迷つ、安養浄土を移にや此しも浄土に成れるかと諸人耳目を驚しいかなる寄瑞ならましと尋至れハ早既に上人入滅成りぬと聞都鄙遠近残りなくわれ劣らしと馳集り山川林野に充滿て⁴¹幾百萬の限りなく道俗男女聲を擧唯ひたすらに泣もあり岩を呻て呼もあり或は大地にふしまろひ死生をわかぬ類もあり或ハ山より谷に落即時に死する人もあり或ハ己と刃に伏し身命すつる族も有り山野叫悲聲ハ忝も釈尊の霧ノ林の曉に人天大會の名残を惜ミしあり様も角やと思ふ斗也七日七夜の結緣も夢の⁴¹間の心地にて遺告なれば力なく御廟に納奉りあかぬ別の悲しさハ乳房を含緑り子か母を尋ルことくにて野山のけしきもたゝならす有りつる艸木も恨しくたゝに悲しき心には世界も闇に成はかり各前後を弁へす七々の忌中ハ過行く餘波の涙いやましに夜日をもわかす往來し結緣利益の末葉の露同じ蓮に結はめと有難こそ覚えけるかな⁴²

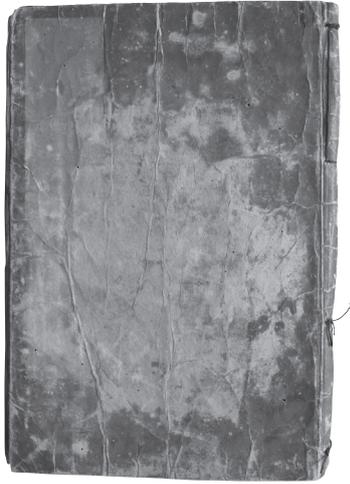
誠に以彈誓上人は忝も西刹の教主阿弥陀如來の化現として濁世末代の惡人を導引キ給ふ大師なり其行状や僧にもあらず俗にもあらず其僧にあらざる事ハ有髮にして俗形を顯セルなり其俗にあらざる事ハ衣鉢を具足し⁴²戒行清浄なればなり是則道俗男女嫌なく十方衆生悉皆西方に導て永く快樂をゑせしむる本願超勝獨妙を顯し給ふ印⁴³ならまし上代諸家の高僧たに皆西方に望をかけ何れも念佛有しそかし今末の世の我々かなにとてか弥陀を念せずして生死の家を出なまし我慢名利の煩惱ヲたに推て頼へし利益に隔あらされハ結⁴³緣空しからさめりされハ彈誓上人の教に異なる御法なし本願念佛明らかに十方衆生もらさしと誓給ひし其故を人にも示しわれも又念佛三昧成就して生前死後の感應ハ國土になへて知るならし名号佛像其奇特今も往々有なれハ見ても聞ても信仰し唯往生を願へしなからへはてぬ世の中に心を迷ふ事なけれ疑者ハ⁴³ウをのつから宝の山に入なから手を空して帰るなる惡業ふかき類ならまし⁴⁴

當村に清左衛門といふ老人有り神奈川宿へ馬を引家業に到る所_ニ老人の修行者_ニ逢り修行者云_フ其方ハ何れノ在郷なるや其方見聞及所靈驗の本尊、不知やと問老夫答けるハ何とて尋玉フや修行者云我れ夢想三度迄蒙り弥陀尊_ヲ夢_ム我を_ニ出_セ迎_テ御冥夢也依て如_レ夢_ニ奉_レ見本尊諸國尋_レ氏未不拜見故_ニ問也老夫云我か家_ニ「₄₅オ本尊有り來りて可_レ拜_云、而_ノ修行者を馬に乗せ鴨居村我か宅_ニ誘ふ僧云早_ク拜_ミたし然ばとて木小屋ノ梁筵包_ニして本尊_ヲ出し拜せける僧殊之外悦我か夢想の本尊是也面貌竹長等符合せり然_ル此本尊何_ト所持_{スル}や老夫云此山_ニほら穴あり誕生上人念佛ノ居玉へり其本尊也上人うせ給へて後ほら穴_ニ打捨置奉_{ルモ}無勿_ク躰思_ヒ」₄₅ウ我か屋_ニ安置して香花供養いたし忝存之外家内病人多出來候故木小やの梁納おき申候といふ然らハ我ハ誕生上人の弟子也実名無白_ト云師の安置本尊_ト云ひ夢想_ト云縁佛也迎一字を開基し大宮山法國寺彈誓上人を開山として又ハ大弘山といふ₄₆オ

〔白丁〕遊オ

〔白丁〕裏表紙見返 「裏表紙

〔白丁〕遊ウ



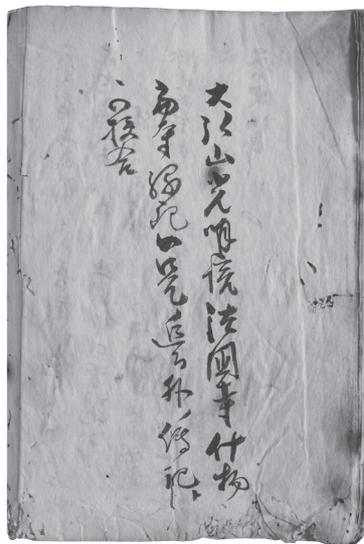
表紙
(以下全て法國寺蔵)



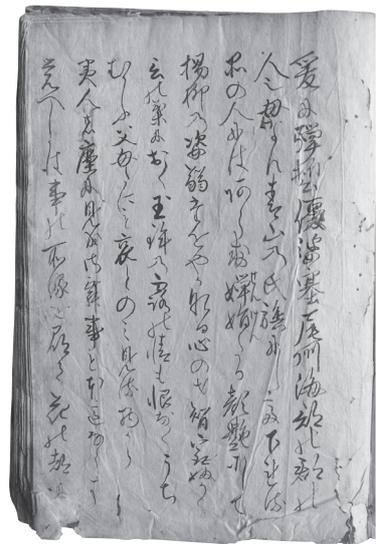
彈誓作八臂辨財天坐像

(せきぐち しずお

本学名誉教授)



巻尾 46 ウ



巻頭 01 才